

ものがたり



小判こばんを拾ひろった孝行こうこう娘め

江戸時代のことじゃ、尾平村にそれはそれは親孝行の娘があつたさうな。娘の名前は「おこと」と言つて、まだ十歳になつたばかりじゃつた。

おこの家は小作こさくで、とても貧しく、その上に子こだくさんで、子どもが七人もあつたさうな。お父ちちつあんとお母ははさんが来る日も来る日も身を粉こなにして朝あ早はやうから夜よ遅おそうまで働はたらいても、年貢ねんぐを地主ぢゆうさんに納なめると手元てんにはほんの少すくしか米こめが残のこらんかつた。

残のこつた米こめで親子おやこ九人くが生きていくには大変たいへんなことじゃつた。ある年の夏なつ、母親ははが八人目やちんめの子こどもを産うんだのじゃが、肥ひ立たちが悪わるうて田畑でんはたけに出でて働はたらけん日ひが幾いく日もあるようになつた。

おつ母ははさんの身体からだは日に日に衰弱じやくじやくがひどうなつてとうとう床とこにつくようになつた。おこととお母ははさんに代かわつて小さい兄弟けいだいたちの世話せわをしたり、一文いちもんでも金を稼かせぐために他家たかの子守こしゆ奉公ほうこうにも出でて行いつた。おことは気持きもちちのやさしい娘めだけに、子守こしゆ先さきの子こどもたちがよくなつき、どこの家いへに雇かわられていっても大変たいへん喜よろこばね、重宝おもたけがられていた。雇かい主ぬしは決か

まって「おことちゃんはおんに子守が上手じゃのう、安心して子どもを預けておけるわなあ。」と、そうした調子で、おことには皆から信頼されるよい子守娘じゃったということさ。

小さな身体で子どもをおんぶしたり、抱っこしたり、まだ年端としはもいかないおことにはきつい仕事ではあったが、家のことを思い懸命に働いた。親孝行のおことは子守をして貰うわづかばかりのお金をお父さんとお母さんに渡して、両親の喜ぶ顔を見るのが一番の楽しみだったそう。

両親もおことのけなげな孝行心を知るだけに、ありがたく感謝しながら、お金を受け取り、その度に「おこと、ほんとにすまんわ、まだ遊びたい盛りのお前にこんな苦労までさせてしまうて」と、おことに詫言のじゃった。

そうしたある日のこと、おことが田んぼのあぜで子どもを遊ばせていると、突然に強い風が吹いてきて、子どものかぶっている頭巾ずかんを吹き飛ばしていった。おことはこれは大変じゃと頭巾を追っていくと、頭巾は田んぼの端まで飛んで行って落ちた。

「ああ、ああ、なんていたずらな風なんやろ。」と、独り言を言って頭巾を拾い上げた。とたん、「おやっ、あれは何やろっ。」頭巾の落ちていた下の田んぼの土の中に何やら。



カッと光るものがあつたんや。

おことはいぶかりながら、その光るものを拾い上げて、麦の手入れをしている主人にそれを見せると、「おお、これは小判じゃ、どこで拾うたんや？」とおどろいて主人は言うた。

「坊やの頭巾が風で飛ばされたので拾いに行くと、その下の土の中にこれがピカッと光つたんや。」

雇い主はしばらく黙ったまま小判を見ていたが、「おことちゃんや、この小判はな、働き者で親孝行のお前に神様がくだされたんや、取っておおき、このお金であつ母さんに元気になる食べ物を買って食べさせてあげることじゃな。」と、やさしく言った。

おことは神様に何度も何度も礼を言つて家に

帰ると、小判を拾ったことをお父とお母さんに話し、さっそくお母さんに卵やうなぎを食べさせたんだと。するとお母さんの身体は日に日に元氣を取り戻し、元通りの元氣な身体に戻ったそう。

この話はたちまち村中に広まり、村人たちは口々におことの親孝行をたたえ、何百年も過ぎた今も、尾平町には小判場こばんば（尾平橋の南の一部）という地名が残っていることや。

えいだいじやま
永代寺山の狸たぬき



おかし、おかし、永代寺山のふもとに徳兵衛どん
という木こりが住んでいたそう。徳兵衛どんはた
いそう木を切ることが上手でどんな大きな木でもま
たたく間に切り倒すほどの腕前じゃった。

ある日のこと、徳兵衛どんが切り株に腰をおろし
て昼飯を食っていると、木の陰からチロチロとこつ
ちを見とる者がある。徳兵衛どんは昼飯を食ってい
る手を止めて、「誰じゃ、そこにあるのは?」と声
をかけると、「わしじゃ、わしじゃ、狸のぞん太
や、まっことすまんがお前さんの食っているいわし
を少しくださらんかのう?」と、狸がよだれを垂ら
さんばかりにして頼みよる。「そうか、そんなにい

わしが食いたいか、もうようけは残つたらんがまだ二匹ばかりあるからお前にやろう。」
と、徳兵衛どんが言うつと狸は大喜びで木の陰からひよいと出てきて、まんまるの目をさらに丸くしていわしを貰つていったんだと。

しばらくして徳兵衛どんは「はてな？狸が人間の言葉を話すわけがないし、ひよつとするとわしは狸に化かされているのかも知れんなあ？」とつぶやきながらひよいと弁当箱を見ると、今まで残っていたいわしが無い。「それにしてもおかしなことじゃわい。」

次の日、徳兵衛どんが昼飯を食っていると、又どこからか「おじさん、おじさん。」と自分を呼び可愛い子ども声がする。声のする方を見ると子狸がごそごそ（笹群ささぐら）の中から呼んだるのじゃ。「何じゃ子狸か、わしに何の用じゃ？」「おじさん、少し弁当よんでくれんかのう。」徳兵衛どんは少し思案をしてから「まあ、いいか。」と、独り言をつぶやくと「ほれ、子狸や、弁当半分やるわ。」と、自分の弁当を半分子狸に分けてやったんだと。

子狸は大喜びでうまさうに弁当をご馳走になると、ピョンピョン跳ねながらどこかに姿を消してしまた。「はて、さて、おかしなことが続くんじゃわい。」徳兵衛どんは不思議でたまらんかった。

こうしたことがあったある晩のことじゃった。徳兵衛さんは誰かが呼ぶ声で目が覚めた。「誰じゃ、こんな夜更けにわしを呼ぶのは?」「わしじゃ、わしじゃ、永代寺山の狸じゃ。」と、戸の外で声がした。「何じゃと、永代寺山の狸じゃと。こんな夜更けに何の用じゃ?」と徳兵衛さんは心配そうに聞いた。「なあに、心配することはないさ、昼飯のお礼に徳兵衛さんに珍しいものをお見せしようと思ひ、誘いに来たんじゃ。」「珍しいもので、いったい何じゃ?」「まあ、それは見てのお楽しみ。」

狸の誘いに徳兵衛さんは少し迷ったが、珍しいもの見たさに狸について行くことにした。徳兵衛さんが家の外に出ると、狸はさっと徳兵衛さんの手を取って風のような速さで走り始めた。「おいおい狸どん、どこまで行くのじゃ。」「狸は答えずに永代寺山の方に向かって走った。

「さあ、着いたぞな。」徳兵衛さんが着いたのは、永代寺跡の荒地の庭じゃった。「ここは永代寺の庭じゃないか?」徳兵衛さんはびっくりして言った。

永代寺は尾平町の永井にあり、昔は立派な七堂伽藍が建ち並び、方々ほつほつからのお参りの衆で大変に賑わった寺であったが、岐阜の織田信長の焼き討ちにあつて焼失してしまい、寺の庭は荒れ放題となつていた。

「狸どん、こんな淋しいところでいったい何を始めようというのじゃ。」と、少し不安になってきた徳兵衛どんは聞いた。

「まあ、まあ、見てのお楽しみ。」狸はケロリとして言うと「ひゅーっ」と叫ぶように喉を鳴らした。それを合図にこれは驚き、今まで静かだった寺の庭が急に賑やかになり、どこからともなく五、六十匹の狸が現れて見る間に輪になった。もう一度「ひゅっ」と狸が喉を鳴らすと、並んでいる狸の腹が一斉に膨らみ、ドンドンポコポコ、ポココロリン、いやはや、なんと賑やかで楽しいこと、「おお、これが噂によく聞く狸の腹つづみというものかい？おお、おお、わしまで踊りとうなってきたわい。」と言いながら徳兵衛どんは腹つづみに合わせて踊り



始めてあった。

どれほどの時が経ったのか、徳兵衛ごんは踊り疲れて、どっとその場で眠ってしまった。

ち・ち・ち・ち・ち・小鳥のさえずりにハッと目を覚ましてみると、徳兵衛ごんは木の切り株を枕にして寝ていたのじゃった。

「何じゃ、夢か？わしは狸に連れられて永代寺の庭で狸の腹つづみを見とったはずじゃのに、それにしても不思議なことじゃ。」夢か現実かわからないまま徳兵衛ごんは悩んだ。じゃが身体の中に残っている楽しい感覚はどうしようもなかった。

「そうじゃ、あれは夢なんかじゃない、きつと狸がわしのために腹つづみを見せてくれたのに違いないわい。」とつぶやくと、徳兵衛ごんは嬉しくなってきた。あんなにおもしろく、楽しく、珍しいものを見た者は世間広しといえどわし一人じゃろ、と徳兵衛ごんは思った。そうして叫んだ。

「おーい、永代寺山の狸よ、いつでも昼飯を分けてやるでなあ、また楽しい腹つづみを打って見せておくれよー。」と呼びかける徳兵衛ごんじゃった。

ゆづれいおさよ

むかし、むかし、おさよという娘が母親と弟と一緒に住んでいました。おさよは親思いの、気立ての良い娘で、弟の世話も大変よくしていました。

ある年のこと、稲刈りが始まるうという時、雨が降り出しました。その雨は何日も何日も降り続き、川の水が溢れ、村を襲いました。困り果てた村人たちは、寄り集まり話し合いをしました。「このままでは、村の作物が全滅だ。」「きつと神様が怒っているんだ。」「そうだ、そうにちがいない。」「どうしたらいいんだ。」「なにかいい知恵はないものかの。」「神様を静めるには、もう生贄しかねえ。」「どこからかそんな声が聞こえてきました。す





ると「そうだ、それしかねえ。」とみなが賛成
しました。「でもだれにするだ。」「ウーン、
若い娘、おさよはどうじゃ。」「あの娘なら、
神様もきつとお許しくださるじゃろ。」

そして、ある晩のこと、おさよは村を救うた
め、川のほとりに人柱ひとしらべとして埋められることにな
りました。母親は悲しみの余り病気になり死
んでしまいました。

それからというもの、子どもたちが夕方遅く
まで遊んでいると、おさよの幽霊が現れ子ども
たちを脅おそかすようになりました。おさよの幽霊ゆうれい
がでるといふ噂はすぐに村に広がり、大人たち
は子どもたちに川原へ行くことを禁じました。

しかし子どもたちにとって川遊びができない
のはかわいそうだと思った庄屋しやうやさんが、おさよ

の幽霊ゆうれいが出るといわれる川へ行ってみることにしました。「あーい、おさよ、出てきておくれ。」庄屋さんが大声で叫ぶと、「何でしょうか？」とおさよの幽霊が現れました。庄屋さんはちよつとびっくりしながら、「何故なぜ、お前は子どもたちを脅かすのだ？」と勇気を出して聞いてみることにしました。するとおさよの幽霊はゆっくり話し始めました。

「私は子どもたちが大好きです。でも最近雨が降り出すとあつという間に水が増え、いつか子どもたちが溺おぼれるのではないかと心配でなりません。だから、子どもたちが川に近づかないように脅かしていたのでございます。」と消えそうな声で答えました。庄屋さんはおさよの子どもを思う気持ちに打たれ、村に帰ってみなげに伝えようとしました。しかしおさよの幽霊が「どうかこの事は誰にもお話にならないで下さい。もし子どもたちが知ればまた、川原に遊びに来ます。このままにして置いて頂いただければ、みなみんなが恐おそれて川原には近づかないでしょう。そうすれば誰も悲しい思いをしなくて済むのです。どうかお願いいたします。」と庄屋さんに一生懸命じしつじけんめい頼みました。

庄屋さんはおさよの幽霊が哀あひれで仕方ありませんでした。しかし、おさよの幽霊の思いを裏切ることができず、誰にも話せませんでした。村人たちの間では「川原に近づくとおさよの幽霊に引きずり込まれるぞ。」と言い伝えられました。そのおかげで、水に溺れ

て死ぬ人は一人も出ませんでした。庄屋さんは村を思う心優しい娘おさよの事をいつまでも忘れることなく毎日川原のほうを向いて拝むのでした。

この様に昔から言い伝えられた話は、単なる幽霊話ゆうれいばなしではなく、水難すいなんから子どもを守る為ために大人たちが作った話だったのでないでしょうか。

龍宮池りゅうみやういけ

むかし、むかし、寺方村てらがたにそれはそれは大きな池があった。池の大きさは一万六千坪つぼほどもあって里山の天神山てんじんやま（大日山だいにちやま）の二倍近くもの面積があったということじゃ。

その池は干害用の池かんがいよういけとして、日照りが続き田に水がなくなつた時に池の水を引き、干ばつから稲作を守っていた。そやさかい地元じよんの百姓衆ひやくしやうにしてみれば、生命とも頼む大切な水やつたんじゃ。

池はいつも満々と水をたたえ、岸边には茅かやや葦あしが生い茂り、村むらの衆達しやうはこの茅や葦で家の屋根を葺ふいたり、すだれや炭俵すみだわなんぞを作る大切な資源しげんにしていた。

ある日のこと、村の若い衆が池に茅を刈りに行つたんだと。その日は天気もよく暖かい日じゃつた。若い衆が夢中になつて茅を刈っていると、俄にわかに空がかき曇り、前方の葦の茂みがザフザフと揺れて何かが動いているのが見えたそうな。「何じゃろう？」と、目を凝こらしてよく見ると、そこに想像もつかなかつた恐ろしいものを見たのじゃ。若い衆は腰を抜かさんばかりに驚いたんだと…。

若い衆が見たものは、胴体が唐傘からかさほどもあるうかと思われる、まだら模様の大蛇だいじやが葦の間をぬって這はって行く姿であった。「わーっ、大蛇や！」若い衆は声にならない声をふりしほって叫ぶと、その場に鎌を放り投げて家に逃げ帰ったんじゃと。

家に帰った若い衆は、恐ろしさのあまり、しばらく口もきけんで寝込んでしもたということじゃ。池の大蛇の話はまたたく間に村中に広まった。「恐ろしいことじゃ、池に大蛇がでるそうな」と村の衆達は来る日も来る日も大蛇の話で明け暮れ、誰も大蛇の住む池に恐ろしがって近寄らなくなり、田は干しあがり稲は枯れ、とうとう米こめが穫とれんようになっしてしもうたんじゃ。



困り果てた村の百姓は知恵を出し合って、大蛇が一番恐れるという龍神りゅうじんさんを池の真ん中に祀まつることにしたそうじゃ。するとどうしたことか、龍神さんを祀まつってからというもの大蛇は姿を現さなくなつたんじゃと。村の百姓衆は大そう喜んで、龍神さんのご加護に感謝をしたそうじゃ。それ以来、この池を龍宮池と名付けて、毎年、七月の十四日を龍神さんの縁日と定め、お祭りをして祝いわうことになつたそうじゃ。

龍宮池は昭和四十五年の耕地整理により、池の大半は埋め立てられて現在一千五百坪ほどになつているが、今も池の西端にコンクリートでおあわれた龍神さんの祠ほこりがあり、世の移ろいの中なんら変わることなく池を見守まもっているかの



よつに、静かなたたずまいをみせている。

また、龍宮池の伝説には、人が池のそばを通りかかると、美しい櫛くやキセルが落ちていて、それを拾おうとすると櫛やキセルはたちまち恐ろしい龍の姿に変わり、人に襲いかかったという話も伝えられている。

弁慶石と大日寺

大日山の南側に、著名な詩人・小説家で直木賞作家伊藤桂一氏（大正六年〜）の生家でもある、寺方町の古刹・天台宗高角山大日寺があります。

天平八年（七三六）に行基菩薩が伊勢の国分寺を国府に建てられたのが、この寺のはじまりとされています。

時代は経て、約四八〇年後の建保二年（一一二四）鎌倉三代将軍源実朝が上洛のあり、尾州（今の愛知県の一部）の大野浦から海路で塩浜浦（今の四日市市塩浜地区）に上陸し、その後は陸路で京へ向かいました。

この時、平家の残党に組んでいた国府の人々は將



軍の上洛をさえぎり、戦になりました。

戦火による消失を恐れた国府方は国分寺の仏像をいったん山に隠し、後に当所にうつして現在に至っているといわれています。

ところで、現在の大日寺参道入り口の右手には、大きな自然石に「高角山大日寺」と刻まれた見事な門碑が建っていますが、その真中の左右にわたって太い筋が入っていることに気が付くでしょう。

それには次のような伝説が伝えられています。



す。

昔、時の住職が大日寺の門碑を自然石で作りたいと探していました。しかしふさわしい石も見つからず、また費用もなくほとほと困りはてていました。その話はいに、総本山のある江州（今の滋賀県）大津坂本の比叡山延暦寺まで伝わりました。それをまた聞きした怪力怪僧の弁慶が、門碑にふさわしい石を見つけて藤縄で縛り、はるばる伊勢国寺方村まで背負ってきたのだそうです。当地で降ろしてみると、なんと、藤縄で縛った跡が付いたままでした。しかし住職はたいそう喜び、石工に「高角山大日寺」と刻ませて建てたのが現在の弁慶石と伝えられている門扉です。